

快晴やや強風の中、定時に高田馬場駅BIGBOX前を18名様で出発。途中、木場公園で緒方さんご夫妻を交え20名様のご参加となりました。

気になっていた河津桜は、やはり日頃の行いからか**1分咲き**とやや残念でしたが文句も無く近く別の品種が満開を過ぎ、散り始めていました。



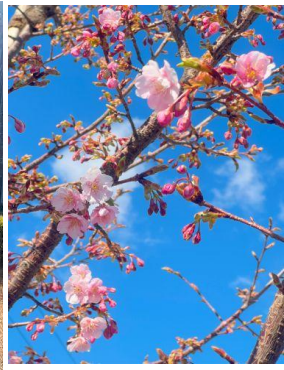
木場公園大橋にて左より小島さん、水野さん、金子さん、桑田さん、後ろに行田さん(三田会)山崎さん、佐藤さん(三田会)、牧野さん、緒方さん、中島さんご夫妻、二列目小島さん奥様水野さん奥様、池澤さん(初)、緒方さん奥様、関口さん、佐野さん(初)、北嶋さん他に滑志田さん

木場公園北にある日本最大の美術館建築である東京都現代美術館を抜け、阿茶局のお墓があ京都知恩院を総本山とする雲光院を訪ね、芭蕉が奥の細道の旅に出かける前の1年半、朝夕の座禅を組んだ臨川庵(りんせんあん)現在の臨川寺へ(庵から約500m)。二週間前私も「茶の湯の歴史」という講義の一つとして生まれて初めて座禅をこの寺で組みました。(芭蕉の位牌もあります)

芭蕉庵跡は、没後大名屋敷になり消滅。1917(大正6)年の高潮で「**芭蕉遺愛の石の蛙**」が発見されその地を芭蕉翁古池の跡」として保存された。すぐ近くの芭蕉史跡展望庭園では、夕焼けが隅田川をまぶしいほどに照らし、最後の記念写真を撮りました。

芭蕉記念館に行く途中の石碑が、江戸から上総の国とを結んだ旧新大橋(両国橋)は、現在の橋より約1kmほど南にあり、赤穂浪士も吉良邸に向かった道として今に残ります。

大阪の深川氏がこの地に来て田を開墾したことから深川の地名になり、今は深川稻荷神社として残っています。想定通り、森下駅より高田馬場駅に向かい、18名はきつuitと考えていましたが11名様となり、初参加の4名様(内二名様は三田会)を交え美酒と歓談の宴後に散会となりました。



やや寂しいなか
散策開始



比較的咲いている木の下で記念撮影



二週間前は満開の河津桜 散り始めた木の下で記念撮影



メジロが忙しく蜜を吸っていた



河津桜と見返り美人



木場公園大橋に向かって 皆さんの足取りは軽い



木場公園大橋の上で緒方さんご夫妻を交え記念撮影 後ろにスカイツリーが望めます



木場公園で最初の休憩 ココで緒方さんご夫妻と別れる(夜は別の飲み会らしい)



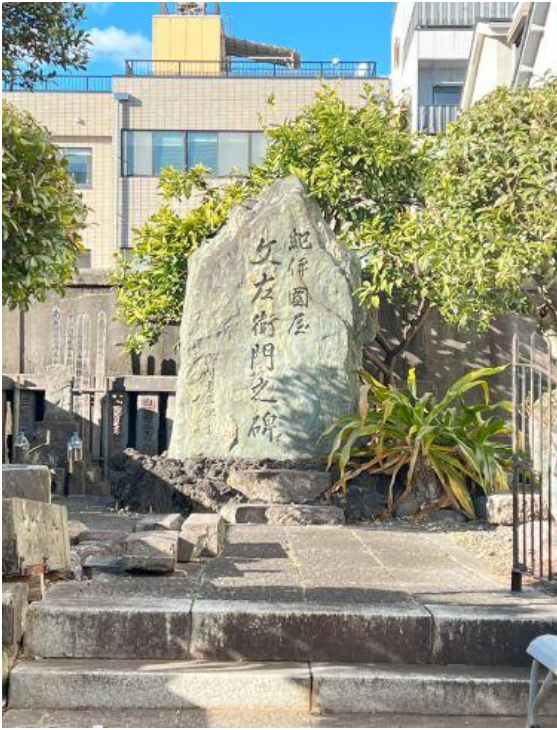
←東京都現代美術館
1995年開館(日本最大の美術館)
設計柳澤孝彦氏 新国立劇場や
東京オペラシティーなど
2017年82歳で没

私は勤務先で柳澤さんの講義を
拝聴し建築感覚で拝見した

↓阿茶局として家康の側室ながら
も有能で珍重されました
当時の女性では立派なお墓です



阿茶局
徳川家康公の側室、才知に優れ、家康公
に常侍権刀として、天下早定・江戸幕府
樹立に無類の功績をあげた。家康・秀忠・
家光の三代に仕え、後に「雲光院」と稱し、
菩提寺雲光院の開基となる。
弘治元年(1555) - 寛永十四年(1637)



→ 出世不動尊（今さら？）
← 紀伊国屋文左衛門の碑



→ 日本一
← 霊殿寺
まずい人気店



← 臨川寺: 芭蕉も朝夕に座禅を組み奥の細道へ旅立つ

江東区登録有形文化財（歴史資料）
清澄三十四一六 臨川寺

玄武仏碑

臨川寺は、承応二年（一六五三）鹿島根本寺・茨城県第二〇世の冷山宗仙和尚が小名木川に近い、現在地に結んだ臨川庵に始まり、仏頂河内和尚（根本寺第二一世）が幕府に願い出て、正徳三年（一七一三）に「瑞雲山臨川寺」という山号寺号を許され、京都妙心寺の末寺となりました。

延宝八年（一六八〇）に深川に移り住んだ松尾芭蕉は、仏頂和尚と親交が厚く、たびたび参拝に運ったと伝えられています。芭蕉の号「枕青」も仏頂和尚に由来するものとされています。以来、芭蕉ゆかりの寺として玄武仏碑をはじめ、梅花仏碑・墨蓮しの碑・芭蕉由緒の碑などが残されています。

玄武仏碑は、美濃派の俳人神谷玄武坊（玄武仏寛政一〇年（一七九八）没）を顕彰するために門下の白山千庵中が建てたものです。延享二（七四四）のことは、

玄武坊は芭蕉門下の各務友孝（梅花仏）が京都双林寺に建てた芭蕉墨蓮しの墨跡を写した碑を臨川寺に建て、毎年三月に墨蓮会を催して芭蕉をしのぐのだといわれています。また玄武坊は梅花仏碑も建てたといわれ、芭蕉と美濃派の顕彰に尽くしました。

江東区教育委員会

平成二六年六月



芭蕉庵跡に建つ芭蕉稲荷神社



時間で向きが変わる芭蕉像





たまには写真に納まりなさい！と優しい小島さんの奥様がシャッターを切っていただいた
→吉良邸(当時の1/86)

周辺案内

屋台発祥の地

当時の両国橋
(新大橋)

旧新大橋跡
安政五年(1858)

江戸時代の両国橋の位置：江戸側には火除地の空地が作られ屋台の発祥の地でもある
* 赤穂浪士は、新大橋(両国橋)を渡り北にある吉良邸に向かったと書かれています



大阪の深川氏が開墾したこの地は、深川と呼ばれるようになる 珍しい牛蒡縄 支える縄柱と言う



【俳句】

桑田 青三

赤染の芭蕉稻荷や冬桜

乱反射冬日の隅田清洲橋

枯芭蕉西日の姿凄まじき

馬道 哲 臨川寺で初めての座禅を組み俳句に詠い先生(恩田侑布子:有名俳人早大文院卒)の添削

椿散る音の幾つや寺坐禅(原作:3位相当原石賞をいただき磨けば良くなる)

↓ 寺坐禅を変えたほうが良い(私的には臨川寺を強調し凜と時間を詠った)

また一つ椿散る音坐禅堂

↓ 椿散るで音がすることは解かるので音の文字を無くする(また一つ さすが)

また一つ雲水堂に椿散る

雲水堂とは、まだ若い修行僧が修行する処 以上、遂行の手順とのこと)

【編集後記】

西東京三田会様よりお二人様、西東京稲門会からもお二人、合計四名様の初参加の方々を迎え

木場公園では、緒方さんご夫妻を迎え、一時、総勢20名様のご参加でした。

(小島さんは、25名様のご参加を率いたこともおありだったとか、頑張ると奥様の弁)

河津桜は、一分咲きと言ったところ、今年はどこも二週間から一カ月遅れているそうです。

私の日頃の行いだけでは、ないようです。芭蕉庵に向かう道中、あまりにも多い神社仏閣の数々

歴史の重みを感じさせます。深川の地名の由来やその神社を訪ね「深川めし」を堪能せず、次回

のテーマとします。(小島さん、以前は深川めしがランチだったとか)やはり桜を相手に散策する

のは、なかなか気が思いやられます。飲み会まで終わり良ければ総て良し!でしょう。

馬道

才知の局 阿茶様



雲光院開基 阿茶局(あちやのつぼね)

雲光院開基阿茶局は、弘治元年(一五五五)に、武田氏の家臣 飯田氏の子として、甲府で生まれました。今川氏の家臣 尾孫兵衛忠重に嫁ぎましたが、忠重の死後は、徳川家康公の側室となりました。

武家出身の女だけに、馬術や武術にも優れ、才知も比類なく長けていましたので、側室でありながら、家康公の懐刀として信頼を得、戦

場や政治の中枢にも身を置きました。政權奪取の諸戦への随行はもとより、大阪冬の陣、夏の陣では、和睦の使者として歴史に残る活躍をされました。

二代將軍秀忠(公)の娘和子(東福門院)入内の折には、母代わりとして供奉し、天皇家からも信頼を得て、「従一位」に叙せられました。

家康公の全幅の信頼を得ていた阿茶局は、家康公の死後も、出家を許されず、三代の將軍に仕え、江戸と京都の宗教的連携、宗教政策の充実、幕府と朝廷間の融和政策推進など、無類の手腕を発揮され、幕府にとって必要な女性であり続けました。

寛永十四年(一六三七)一月二十二日に八十三歳で、京都にて逝去されたと伝えられ、晩年の活躍の場であった京都東山金戒光明寺に葬られ、京都では上徳寺を菩提寺とし、江戸では雲光院が菩提寺となりました。

阿茶局の存在は一般では地味ですが、女性の政治進出、その才知と手腕、歴史を動かした幼緒としては出色で、歴史上に名を残す女性達の中においても屈指の存在と言えるでありましょう。

阿茶局参りのご利益・功德を申せば、「女丈夫」「才知向上」「冷静沉着な心の金得」「諸願成就」であります。

臨川寺と芭蕉翁（私の初坐禅時に購入200円）

臨川寺と
芭蕉翁

MYOSHIN-JI SCHOOL OF THE RINZAI ZEN
RINSENJI-BUDDHIST TEMPLE



縁起

江戸開府から半世紀が過ぎた承応二年（一六五三）、その名も明けき深川清澄の地に一軒の庵が建ちました。「臨川庵」と名付けられた草庵の主となったのは、常陸国鹿島（現在の茨城県鹿嶋市）にある根本寺二十世冷山宗仙禪師。当寺の開山である仏頂河南禪師の師に当たられます。

それから二十年余、延宝二年（一六七四）に冷山禪師が亡くなり、仏頂禪師が根本寺二十一世として跡を継がれた折、ある騒動が起りました。住持交代の取り込みを奇貨とした鹿島神宮宮司との間で、徳川家康公より与えられた根本寺の寺領五十石の所領争いが起ったのです。

仏頂禪師は直ちに幕府に対して寺領挽回のための訴訟を起しました。以来、禪師はたびたび江戸に赴いて

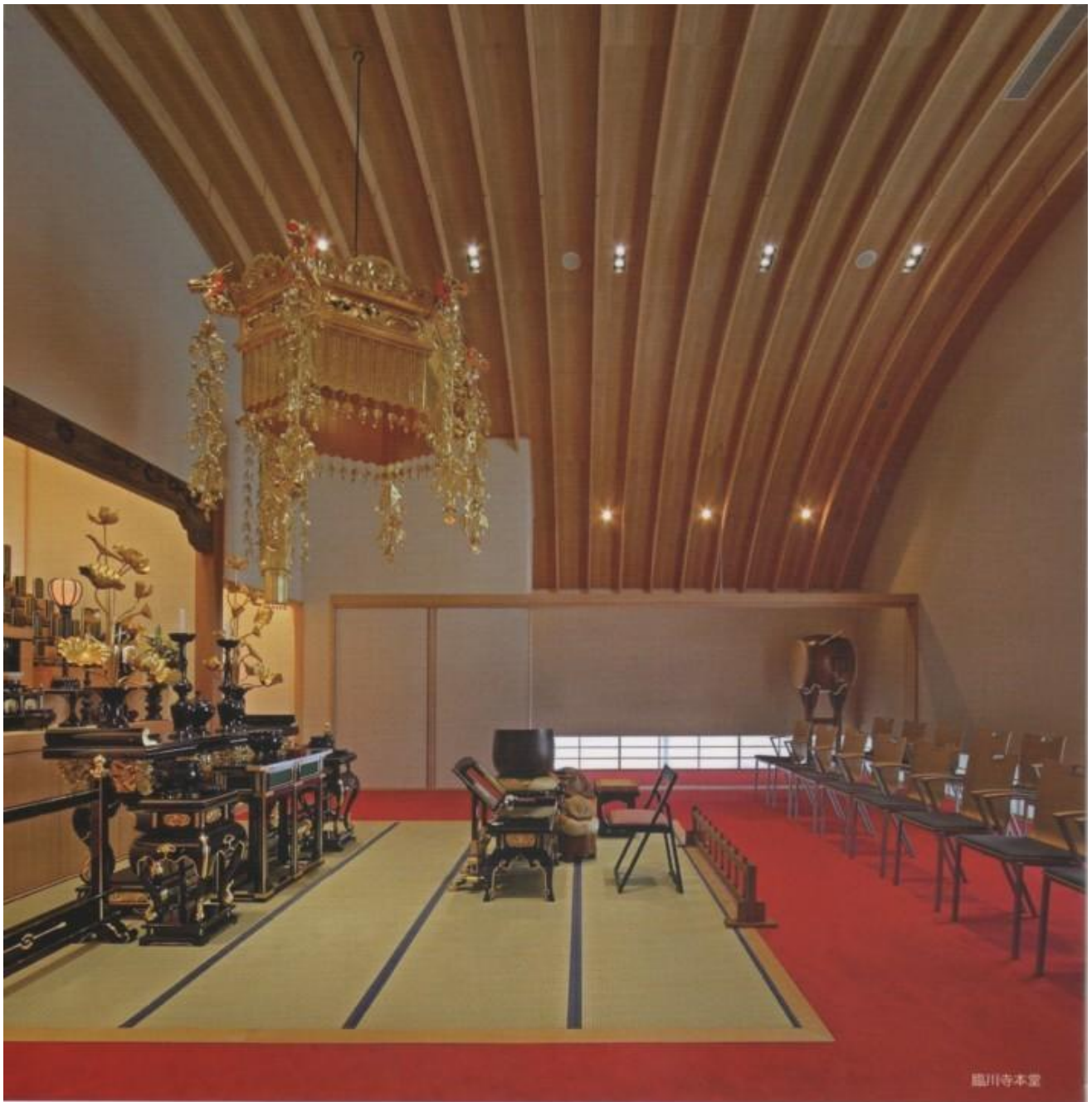
は臨川庵に起居し、根本寺側の勝訴に終わるまで力を尽くすこととなります。

一方、この訴訟沙汰は思わぬ出会いを生みました。臨川庵のほど近くに同じく庵を結んでいた俳聖・松尾芭蕉が、仏頂禪師の人柄を慕って参禅するようになったのです。この縁で松尾芭蕉は臨川寺の開基とされています。

幕府の許しを得て正式な寺院になったのは正徳三年（一七一三）、寺号は臨川寺としました。

創建より長い年月が過ぎ、関東大震災や第二次世界大戦の空襲などで本堂を失う大難にも遭いましたが、都度、先住たちの尽力と寺を支える熱心な檀信徒によって再建され、今に至っています。

開山………寺を開いた僧侶。
開基………寺を開くことを発願した人物。



臨川寺本堂

|宗派| 臨濟宗妙心寺派
 |山号| 瑞雲山
 |寺号| 臨川寺
 |創建| 正徳3年(1713)
 |開山| 仏頂河南禅師
 |開基| 松尾芭蕉

年表

承応2年(1653) 前身となる臨川庵が建立される。
 延宝2年(1674) 10月 冷山禅師遷化。仏頂禅師が後嗣となる。
 鹿島神宮を公儀に訴え出る。
 天和2年(1682) 6月 公儀より勝訴の沙汰が下る。
 仏頂禅師、根本寺住持を退き、臨川庵に移住。
 元禄8年(1694) 3月 臨川庵を寺院とする公許を出願。
 正徳3年(1713) 9月 公許が下り、瑞雲山臨川寺となる。
 大正12年(1923) 3月 関東大震災による火災で堂宇、芭蕉翁像など焼失。
 昭和20年(1945) 東京大空襲による火災で全焼失。
 昭和37年(1962) 戦災で失われた石碑を再建。
 昭和63年(1988) 焼失した芭蕉翁像を再興。
 平成26年(2014) 5月 本堂新築。

- ①坐禅は写真中央にある丸い座布団みたいなものをお尻の下に敷き約1時間行う(私たちは20分)
- ②左の段の上には芭蕉の位牌がある(どれかは解からなかった)
- ③左手前に芭蕉の木像があります(2P後に写真有)



開基 松尾芭蕉

俳諧師となるまで

当寺の開基である松尾芭蕉は、俳句の大成者として知られる日本文学史上の偉人です。

正保元年（一六四四）、伊賀国（現在の三重県伊賀市）に生まれた芭蕉は、寛文年間の初め頃、主君である藤堂主計良忠とともに、京都にいた貞門派俳諧の名手北村季吟に入門しました。当時はまだ俳諧師として身を立てることなど考えてもおらず、藤堂家に仕えることについてか十分に知り立てられることを夢見ていたようです。しかし、良忠が寛文六年（一六六六）に若くしてこの世を去ってしまったため、望みを絶たれてしまいます。失意のあまり世を憐んだ芭蕉は出家を考え、一時は京の禅林に寄留し、修業した時期がありました。です

が、己と向き合った結果、残ったのは俳諧の道を「生涯のはかり事」とする決意でした。

そこで、再度北村季吟に師事し、延宝二年（一六七四）に『俳諧埋木』の伝授を受け、新天地を求め江戸に下つてからは号も桃青と改め、一介の俳諧師として歩み始めます。

江戸での成功と深川への転居

日本橋界隈に腰を落ち着けた芭蕉は、俳諧好きの磐城平藩藩主・内藤風虎の江戸藩邸に出入りするようになり、人脈を広げていきました。特に談林派俳諧の第一人者、西山宗因との出会いは、芭蕉の作風に変化を促します。

延宝四年（一六七六）の春には、盟友である山口素堂とともに『江戸両吟集』を刊行。江戸俳壇の新星として順調に経歴を重ね、幾人もの弟子を持つ宗匠となりました。さらに、京俳壇にも自作集を披露したり、『桃

臨川寺と芭蕉翁

MYOSHIN-JI SCHOOL OF THE RINZAI ZEN
RINSENJI-BUDDHIST TEMPLE

青門弟独吟二十歌仙」など弟子筋の作品を集めた句集を出すなど、俳壇での地歩を固めていきます。

ところが、延宝八年（一六八〇）になって、芭蕉は順風満帆の毎日に自ら水を差すような行動に出ました。突然日本橋を引き払い、深川に移り住んだのです。当

時の深川は新興地であり、俳諧を趣味とするような裕福な町人はほとんどいません。交通の便のよくなかった時代、俳諧師として生計を立てるには不利な土地でした。にもかかわらず、なぜあえて深川を選んだの

か。理由については諸説あり、定かではありませんが、結果として深川での生活が、後に蕉風と称されるようになる新境地を生むこととなります。



芭蕉翁像（臨川寺蔵）

仏頂禪師との出会い

深川移住で門弟の数が減り、生活に困窮するようになった芭蕉。天和元年（一六八二）の冬には、

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

という句を詠んでいます。雨漏りするほどの苦屋住まいに侘しい思いをしている様子が目に浮かぶようです。

こうした生活は句風にも影響し、徐々に談林風の洒脱や滑稽味が抜ける一方、蕉風の肝となる閑寂、枯淡の境地が加わっていきました。

そして、仏頂禪師との出会いが蕉風の確立に決定的な影響を与えます。

二人の初対面がいつであったかは記録にないのですが、芭蕉は二歳年上の仏頂禪師の人柄に感服し、足繁く参禅するようになりました。庭前に芭蕉の植わることから芭蕉庵と呼ばれた草庵が、臨川庵とほんの五百メートルほどしか離れていなかったことも、二人の交流を深め

る助けとなったのでしよう。

やがて、門弟たちの援助で新生活も落ち着きを見せ始め、芭蕉庵は新しい俳風を模索する一門の拠点となりました。号を桃青から芭蕉翁と改めたのも頃のことです。禅味が加わった芭蕉の作風は、従来見られなかった高い精神性を俳句の世界にもたらし、文芸としての価値を世間に知らしめました。

仏頂禪師との交流と蕉風の確立

天和二年（一六八二）の年末、江戸で大火が起こり、芭蕉庵は焼失してしまいます。この禍いをきっかけに芭蕉は生涯を旅人として生きる覚悟を決めたといいますが、そこには仏頂禪師に参禅を重ねることで身についた無常観も影響していたことでしょう。

以降、芭蕉は『野ざらし紀行』に書かれた貞享元年（一六八四）の旅を始めとして、全国各地を遍歴することになります。

『鹿島紀行』によると、貞享四年の秋には弟子の河合會良と宋波（本所常林寺住職）とともに鹿島に行き、根本寺に寓居していた仏頂禪師を訪ねました。

芭蕉は禪師とともに月見を楽しむつもりでしたが、折悪しく雨となり、「はるばると月を見に来た甲斐がなく、実に残念なことだ」と書いています。しかし、禪師は芭蕉のそのような愚痴にも、

おりおりにかはらぬ空の月かげも
らざのながめは雲のまにまに

との和歌を読んで慰め、芭蕉も、

月はやし梢は雨を持ながら
寺にねてまことかはなる月見かな

の二句を詠んで禪師の気持ちに応えました。芭蕉の禪師を慕う心はさらに高まり、元禄二年（一六八九）三月に始まった「おくのほそ道」の旅で下野国に入った折には、禪師がかつて住まった雲巖寺を訪ね、

木啄も庵はやぶらず夏木立

の一句をのこしました。

また、禪師から芭蕉を訪ねることもあったようで、元禄七年（一六九四）に芭蕉が書いた書状には、禪師が病をおして芭蕉庵にやって来て、夜遅くまで仏法や俳諧の話をお話を交わしたと記されています。この時、禪師が「梅桜みしも悔しや雪の花」と詠み、芭蕉はその高潔な作風に感心しきりだったようです。

その後も旅に暮らした芭蕉は、元禄七年（一六九四）、大坂で病を得て客死しましたが、訃報に触れた禪師は自ら戒名を贈り、位牌を作って臨川庵の仏前に安置したといわれています。そして、臨川庵を正式な寺にする際、開基を亡き芭蕉とすることで、長年の交誼を記念し、御霊を慰めるとともに、稀代の文人の名を永遠に止めたのです。

俳諧埋木……北村季吟の俳諧論書。

宗匠……和歌・連歌・俳句・茶道などの師匠。

無常観……一切のものは無常であるとする観想。

寓居……かりに身を寄せている住居。かりずまい。



石碑解題

1. 墨直の碑



碑文

我師は伊賀の国に生れて、承応の頃より藤堂の家に住ふ。其先は桃地の党とかや、今の氏は松尾なりけり。今また四十の老とまたず武陵の深川に世を遁れて世に芭蕉庵の翁とは人のもてはやしたる名なるべし。道はつとめて今日の変化としり俳諧に遊びて行脚の便を求むといふべし。されば松島は明はの、花に笑ひ、象潟は夕べの雨に泣と、そ。富士吉野の名に封して吾に一字の作なしとは古とはばかり、今を教ふるの辞にて、漂泊すてに廿とせの秋のくれて、難波の浦に世を見果けむ、其此頃は神無月中の二日なりけり。サるる湖氷のほとりに其魂とことどのて、かの木曾寺の苔の下に千載の名は朽せらまし。東花坊、ここにこの碑と遊る事は、頓阿西行に法縁をむすびて道に七字の心と伝ふべきと也。

其銘

あづきや武ヤしの国の名にしあふ世に墨直の先
にたつ

人にあらずにありし世の言の葉はみな声ありて

その玉川のみなみかみの水の、こころぞ汲てしる六

すじ五すじたてよきに

流れてすえばふか川や、この世を露のおきてねて

その陰たのむその葉だに

いつ秋風のやよりけむその名ばかりにとよ子をまぬ

春とかがみの人も見ぬ身と難波津の花とさくは

なの鏡に夢を覚ぬる

一解説

芭蕉の門人である各務支考が、師の十七回忌にあたる宝永七年（一七二〇）に、京の雙林寺すうりんじに建立した石碑を写したものである。雙林寺は芭蕉が敬愛してやまなかつた西行法師さいぎょうぼうし縁の寺である。毎年三月には墨直会（碑を洗い浄めて彫字通りに墨を入れ直し、然る後、法会ほふかいを営み句会を催す）が行われている。たことから、「墨直しの碑」と呼ばれている。

2. 芭蕉由緒の碑



碑文

抑此臨川寺は、むかし仙頂禪師東都に錫とことめ給ひし旧地也。その頃ばせと翁深川に世を追れて、朝暮に来往ありし参禪の道場也とぞ。しかるに、翁先だたらて遠化し給ひければ、禪師みづから筆を染めて、その位牌と立置れける因縁と以て、わが玄武先師、延享のはじめ、洛東双林寺の墨直しをしと移し、年々三月にその会式を言ふ且、梅花仏の鑑塔と造立して東国に伝燈をかけ給ひし、その発願の極意と石に勒して永く成功の板せらん事を爰に誌すものなりし。

文化坊石一 以中坊待買 礎石坊四睡

一解説

「墨直しの碑」の写しと梅花仏碑が臨川寺に建立された由来を記したもの。名が刻まれた文化坊石一、以中坊待買、礎石坊四睡の三名は神谷玄武坊の弟子で、白山下連中に所属した人々と思われるが、経歴などは不詳。



りん ざい しゅうみょうしん し は ずい おう ざん
臨濟宗妙心寺派 瑞甕山
りん せん じ
臨川寺

〒135-0024 東京都江東区清澄 3-4-6
TEL:03-3641-1968 FAX:03-3641-1998
MAIL:rinsenji@baynet.jp



都営地下鉄大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河駅」
A3出口から徒歩3分
お越しの際は、なるべく公共機関をご利用ください。

●無断転載、複製を禁じます。